＜日本イギリス哲学会　第７１回関西部会例会　報告要旨＞

報告１： 商業社会と女性：ヒュームからトンプソンまで

山尾　忠弘

アダム・スミスは『国富論』の中で商業社会について次のような特徴づけをした。「分業がひとたび完全に確立すると、人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは、かれの欲望のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。かれは、自分自身の労働の生産物のうち自分自身の消費を上回る余剰部分を、他人の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することによって、自分の欲望の大部分を満たす。このようにして、全員が交換によって生活するようになり、ある意味で商人になる。そして社会そのものも、まさしく商業社会（a commercial society）とよべるようなものに成長するのである」(Smith 1981 [1776]: 37 訳 I 67)。スミスの後の経済学者は、この「商業社会」という言葉をキーワードにして経済社会分析を進めていったが、この分業と交換を基礎とする新しい社会において、女性がどのように位置付けられてきたのかについては十分に専門的な検討がなされてこなかったように思われる。本報告の問題意識は、この空隙の一部を埋めることにある。報告者の能力の不足から、主として検討される思想家はイギリスの思想家に限られるが、商業社会における女性の地位について 18 から 19 世紀の思想家・経済学者がどのように考えたかの一端を明らかにしたいと思う。なお、本報告は報告者が『経済学者たちの女性論』(昭和堂、2024 年度刊行予定）と題する書籍に寄稿する一章をもとにしたものであることを付記しておく。

＊本報告は JSPS 科研費（24K15920）の研究成果の一部である。また研究課題の遂行にあたって慶應義塾大学学事振興基金の援助を受けた。記して感謝申し上げたい。

（大阪経済大学）

＊報告２の要旨については 11 月後半に公表する予定です。